
夢幻一夜の月に酔う

李兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻一夜の月に酔う

【Nコード】

N0423Z

【作者名】

李兎

【あらすじ】

戦国BASARAの夢やNLやら、友情ものがメインの短編集。例によって作者の願望が溢れ返っています。とりあえず色々書きなぐってるので注意。長編番外も連載する（つもり）よ！

「 f a s t 」

こんにちは、お久しぶりです（、・・・）
長編ネタが行き詰っているようなそうでもないような、倦怠期つかスランプです李兔です。

『蒼天依存症候群。』ではお世話になっておりますが、この度は暇つぶしと称して短編集を作成しちゃいました。
長編のスピノフやら夢小説やら、新作（笑）の試し読みだったりと、好き勝手載せるつもりです。

蒼天ryの主人公、葵さんの前世版のお話もちまちま載せていきます。基本は夢とNL、友情ですおw ある意味女性向けなのでご注意ください。破廉恥ならば書くから逃げるなら今の内だよ（待ちなみに書き方統一してないけど許してね！ だって決めてないんだもの、改行無しだったり好き勝手分けてたり、でもBASARAだってことは言い切れる！

捨て駒の自己満足ばかりですがザビー様のような生温かい目で見守って頂ければ本望です。まあ今までの経験上、短編集はなかなか自由ですフリーダムです。……お覚悟なされよ！

ではでは、皆様に少しでも戦国BASARAの魅力が伝わることを願って。

20111201 李兔

嘲笑つ貴方を、この腕の中で殺めてしまおうか！）（前書き）

初っ端からグロくてすまそ……！

流血表現あるので苦手な人は注意です。先に言います、蘭丸ファンの方ごめんなさい。私も彼は好きです、弟です（待て

嘲笑つ貴方を、この腕の中で殺めてしまおうか！)

錆びたような鉄の臭いが肺の中に充満し、思わずむせ返りそうになる。恐ろしく気分が悪い。戦場などという場には、今日初めて訪れた訳では無い。今更何を、と自らを叱咤してみるが、あまりの気持ち悪さにそれさえも考えられなくなった。ダメだ、今はもう任務だけを考えよう。でないとやってられない。

口元を覆う布を今一度締め直し、袖口に隠した苦無にそつと触れる。ひんやりとした冷たさは熱に火照った体には気持ちよく、真紅に染まった指先でさえそこから離せないでいる。これはまだ、使つてなかったつけ。そうだ、まだ至近距離まで迫られていないんだ。

ひっそりと逃げ込んだ影暗闇から、そつと苦無を持って鈍い光を放つ一閃を描くだけ。かなり距離はあったはずなのに、奏でられる断末魔は耳元に響き渡った。嗚呼、なんて悍ましい。なんて哀しい、なんて恐ろしいんだ。

「……さてさて、これからどうするかな」

出陣の合図である法螺の音はもうだいぶ前に鳴らされた。が、夕日が傾き、戦場を茜色に浸すその刻まで、今日の戦は終わらないのだろう。頭上にて刺々しい閃光を放つ日輪を睨みつけ、深いため息を吐けばどうしようもない遣る瀬無さに襲われた。と、視界の端にちらりと映る家紋に目を見張る。

此処は戦場より少し離れた森林の中。気を付けるべきは忍であつて、このような足軽では無い。否、今ここにいる兵士たちは恐れるに足らないのだ。青白い顔色に真紅の化粧、放り出された手足が何よりの証拠になる。降りて確かめるまでもないが、それぞれ両

軍の家紋を背負った兵士たちは無残にも息の根が止まっていた。大方どちらかの兵士がこの森林の中に隠れていて、それを見つけた一方が攻め入ったのだろう。だがそれにしても謎が残る。少ないと言えど、この人数の殺し合いを終えて生き残った兵は、すぐに戦場に戻ったのだろうか。普通ならば此処、もしくはこの近くにて休んでいるはず。にしては 気配が感じられない。嫌な予感がする。忍の勘が当てになるものなのかどうかは定かでは無いが、これは強者が現れて一気に勝負が付いたと考えたほうが良いだろう。しかも、敵も味方も巻き込んで殺めてしまうような 婆娑羅者のような、厄介な輩が。

「とすれば、もう戦場に戻ったと考えるのが普通だよ……」
“普通”なら」

唐突にその禍々しい殺気を纏い、疾風の如く空を翔るそれを指で挟む。刃の先に塗られた紫が、相手が己をどうするつもりだったのかを物語る。艶めいた紫色が己の肌に突き刺さった時、血と共に巡る悪しきものにこの命は尽きるのだろう。刃に身を引き裂かれる痛み、じんじんと呻く毒の痕。死については覚悟を決めているが、自分が殺そうと嘲笑する輩がいるのだと考える度に背筋が凍りつく。自分は忍だ。主君の影となり、無を貫き通す者。その為に己を殺す忍はこの日ノ本に五万という。それならば一人くらい、心を持つ者がいても良いじゃないか。苦しむのも涙を呑むのも、己ただ一人と言っのなら。

「ボクに何の用だ。早く主君の元へ帰るべきだと思っよ」

「うるせえ！ もうバレてんだから顔見せろ、それともそこで射てやろうか!？」

まだ顔に幼さが残る少年 森蘭丸は、その毒々しい紫の艶を放つ弓をこちらに向け、獣の如く吠えた。憎悪に燃えるその瞳を眺め、ずっと冷えていく心を認める。傷つくのは己だけだと知っていた。だからこそ無意識に、自分を護ろうと自己防衛本能が働くのを黙認してきた。

なんて弱い自分。なんて浅はかで、脆い人間。

「お前なんか、蘭丸一人で充分だ……！」

絞られた標的は自分、その矢を握る手が震えているのが此処からでも見えた。あと少し後ろへ退けば、そこはもう死ぬる場所、戦場であるというのに。なんて静かな森なんだ、此処は。

「お前なんか、お前なんか……っ、」

「魔王の子ねえ。思ってたよりガキみたいだから、最期に慈悲でも与えてやろうか」

「黙れ！ 蘭丸と勝負し」

憎悪を宿していた瞳が、純粋な驚きからか見開かれる。前髪を結っているからだろうか、澄んだ瞳をよく覗くことができた。一気に縮まったこの距離では彼の体の震えも心情も、悟ってしまうにはあまりにも容易い。凍えた吐息が己の唇に掛かる。静かに微笑を浮かべたが、近すぎるこの距離では彼に披露することは不可能だろう。

「良い？ これはボクの慈悲だ」

わざわざ懷に手を伸ばし、乾いた血が張り付いたままの苦無を漁る。子供の首筋にひたと押し当てれば、わかりやすいくらいビクリと大きく揺れた。

「きみの仲間を殺めたこの苦無で、楽に逝かせてあげる。だから、」

ボクを恨まないで、この乱世に生を受けた輪廻の波を呪ってね。

一瞬にして視界を覆う真紅を、舞い乱れる鮮血を、その美しさを、その残酷さを。空虚な胸を貫くそれに重ねて目を伏せる。我ら忍に残るもの。それはきっと、何処へも還ることができない最期の“無”、ただ一つだろうと嘲笑^{わら}って。

嘲笑つ貴方を、この腕の中で殺めてしまおうか！）（後書き）

ちなみに作中の語り手は、葵さん／戦国ver.だったりする。

いつか彼女の紹介も載せたいですが、どうも長ったらしい…… or

z

そして帳は降りる（前書き）

佐かす、ですが佐助は未登場。イメージは謙信×かすが（ ）佐助。

そして帳は降りる

眩いばかりの月明かりが、己の影をより一層濃くさせる。

今宵は生憎、新月には程遠い日和。偵察をするには向いておらず、大抵の忍は断念せざるを得ない宵だ。が、今日に限ってそんなことは言っていられない。敵が動いた。先日の戦は痛み分けたった為、しばらくは動かないだろうと踏んでいた我々が甘かった。まだ兵は進行していないはずだが、場合によってはそれも時間の問題。いち早く新しい情報を手にし、あの方にお届けしなければ。そうすればきつと、あの方は喜んで下さる。あの方が傷つく事も無い。一度、そのように考えてしまつと浮足立つ心を抑えることが出来なくなつた。

我が脚よ、もつと速く、疾風の如く夜を切り裂け。我が感覚よ、あの方の敵になるものをいち早く察知し、この手で蜂の如く突き刺してしまえ。

焦る身体と求める心。なんて矛盾しているんだ。己の事ながら笑ってしまう。今は任務遂行を優先しなければ。嗚呼、なんて鬱陶しい月明かり。気が散るだけだ、もし月影なるものが存在するのなら、この身もどうか隠してくれ。月光なんて、明るみなんてふいにアイツの声が頭蓋に反響し、くらりと眩暈がした。

『並の忍は月を嫌う……だが俺様は別さ』

気取りやがつて、とは思うが。そう考えられる思考が一時、羨ましくもあつた。

『空にお前が居る限り、この影も絶えはしない』

地上に映されるその影を全く苦にせず、寧ろ己の象徴なのだと笑っていた。あの冷ややかな目で、ひっそりと浮かべられた微笑に何度この背が凍りついたことだろう。

武田の事情などに興味は無いが、アイツはアイツで良い主君に恵まれたと思う。あんな惨い覚悟が決められるだけの人間なのだ。謙

信様の足元にも及ばないだろうが、佐助なんぞの価値観と同じ扱いにしてほしくない。

だけど、だ。

「……アイツなんか、敵に見つかって苦労してれば良いんだ」

嗚呼、今だけは宵の空にぽっかりと浮かぶ月に変化したい。あの調子づいた影を誰よりも濃く映し出し、月影なんぞには埋もれさせてはやらない。ふざけた猿色さるいろの悪夢は御免だが、天の狐に化かされるつもりも毛頭無いのだ。

月になってアイツを照らして、困らせてやれたらどんなに楽しいか。ふいに口元が綻ぶ。面白い、いつか試してみようか。頭上に輝く満月を眺め、ひっそりと笑みを深めた。

『わたくしのうつくしきつるぎよ……おまえとみるつきが、わたくしはいちばんすきなのです』

あ、あれ？ 何故だ、私。

月になって一番最初に照らすべきは謙信様だろう？ なのに私は今、誰を思い浮かべた？ 誰を照らしたいと思った？ 私は わたしは誰の頭上で輝きたい？

「そ、んなの……」

認めないぞ。誰に放ったかもわからぬ呟きは、影となった漆黒の闇夜に波紋を広げ、溶けるようにして消え逝く。最初から、何も無かったかのように。

そして帳は降りる（後書き）

佐助の片思いよりはかすがの片思い派です。女の子の切ない片思い
って超可愛いじゃないですか！？（自重

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0423z/>

夢幻一夜の月に酔う

2011年12月1日18時50分発行